
家出少年 迷子少女

サイコロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家出少年 迷子少女

【Nコード】

N1176S

【作者名】

サイコロ

【あらすじ】

母が死に、父が再婚した。

そんな当たり前のことに嫌気がさしたので、主人公は家出をすることに決めました。ただ、家出先に問題が・・・。

1 (前書き)

とても拙い文や内容の上、手探りで流れが決まっていくなので、期待はなさらない方がよいかと思われます。

小学校に上がったころだっただろうか。

病弱でありながらも自分と遊んだりして深い愛情を注いでくれた母が、死んだ。

それを聞いた時は小さくてよく理解できなかったのだが、涙はぼろぼろと出てきた。

もう会えないのだと、なんとなく分かっていたような気がする。

幸い、家は裕福だったから父の男手ひとつで育てられることもなく何も変わらずそのまま生活した。

母はだいぶ前から病院暮らしだったから、生活に変化はなかった。けど、生活に変化がなかった、というのが少し腹正しかった。

どうして母はもういないのに、こうも変わらない生活をしているのだろう・・・。

そうおもったが、学校では友達ができ勉強も楽しかったからそんなことすぐに忘れた。

母はもういないけれど、父はいる。

だから、頑張って生きていこうと、そう思っていたのに。

6年生に進級したころから、家にちよこちよこ1週間に1回ぐらい真奈美、という女が顔を出すようになった。

どうやら、母が生前親しくしていたようで父とも親交が深かったそうだ。

だからといって家に来すぎじゃないかと思ったけれど、口には出さなかった。

なぜなら、真奈美には娘がいた。自分と同年の深愛、というのだが口数は少ない方くけれど話すことは面白く、顔もかわいらしいとてもいい子だった。

なので、毎週あっているうちに、親友に近い存在になっていた。

だから、わざわざ父に真奈美に来ないでほしい、などと言ったら深愛に会えなくなってしまう。

そういうこともあり、どんどん父と真奈美は仲が良くなっていった。

小学校から卒業する時期が近付いてきたころ、父に大切な話がある、と言われた。

母がいなくなる前にもそう言って呼び出されたことがあったので、とても嫌な予感がした。

案の定、予感的中した。

今度父が真奈美と再婚する、という話だった。

この話はもう決まっていて、相談というよりも報告、といった話し方だった。

別に再婚は嫌ではなかった。

深愛と毎日顔を合わせられることはとてもいいことだし、真奈美も世話を焼いてくれた。

ただ、真奈美が時折見せるゆがんだ笑みがとても嫌いだった。まあ、そんなことで話がなくなるわけもなく再婚は行われた。

それから、大変なことが起きた。

真奈美の人格が急変したのだ。

大量の服や装飾品を父に相談することなく買いだし、

深愛のことばかりをかわいがり、自分には目もくれず、

たまに呼び出したかと思ったら説教か父に頼みを伝えてくれ、ということばかり。

そんなことがありながらも、深愛とともに自分も中学に入学した。

それから1年。

ついに真奈美に嫌気がさした俺は、離婚を父に勧めるのではなく、家出を決行することにした。

1 (後書き)

感想などを書き込んでくれたりとたすかります。

まだまだ話は続きますので読んで行ってくれるとありがたいです。

更新はかなり不定期です。最悪何年後の可能性もあります。

・・・よろしくおねがいたしますー・・・。

2 (前書き)

連載ものの2話目でございます。

とても懐かしく感じますね。

活動報告見るまで完全に主人公の名前忘れてたりしました。
手探りですよ、ほんと。

もう夏休みに入ります。

「――では皆さん、健康に夏休みを過ごしてください」
・・・やつと長かった校長の話が終わり、終業式も幕を閉じた。
教室に帰り、通信簿を受け取って深愛と家に帰った。

「ただいま」

「ただいまー」

二人で家の門に向かって声をかける。

特に音を立てるわけでもなく門が開き中に入る。

「・・・やっぱり、慈君の家は大きいね」

「何をいまさら・・・」

真奈美と深愛が家に来てから1年と少し。

ほんとに何をいまさら、という感じだ。

「・・・けどね、深愛の家はアパートだったから・・・」
・・・。

確かにそれは大きく感じてしまうな・・・。

自分で言うのもなんだが、家は結構金持ちで。

家もそれに比例するわけで。

豪邸といっても差し支えない程度に大きい。

「ずつといるとそれほどでもないんだけどな・・・」

「・・・深愛は、ずつとじゃないから・・・」

「ま、そりゃそうだ」

そんな会話をだらだらと続けているうちに玄関にたどりついた。

俺は、深愛と会話しながら扉横の小さな箱のカバーを開けて手をかざす。

ピピピと指紋の認証音になり、扉の鍵が外れる。

「じゃ、夏休み楽しめよ」

「・・・うん」

扉を開けて入りそこで深愛と別れ、真ん中にある階段の横にある扉を目指す。

家の中には空調の効いた涼しい風が漂っていた。

その扉の向こうには、左右に2つずつの扉と庭へとつながる扉がある。

庭のほうの扉に向かいその扉の横にもある指紋認証の機械に手をかざし、外に出る。

家の中のひんやりとした空気がうだるような暑さの熱へと変わる。

「うー、あちー」

暑さに愚痴を言いながらも歩を進める。

今年は猛暑だと、そう真奈美が言っていた気がする。

この家の庭は、そこら辺の自然公園と同じくらいの大ささがある。

そのため、生えている木や植物がとても多い。

小さいころはこの庭でよく深愛と遊んだ。

最近はめっきりなくなってしまったけど。

その小さいころ、深愛とかくれんぼをしていたときあるものを発見した。

コンテナだ。

庭の隅のほう。

たくさんの木々に隠れるようにしてたたずんでいたそのコンテナに、小さい俺は興奮を隠せず近づいた。

なんとそのコンテナは今でも生きていて、中は電気も通る。

そしてそのコンテナは今の俺の”秘密基地”になっている。

その”秘密基地”に、今俺は向かっている。

秘密基地には机、いす、扇風機、食料などその他もろもろたくさんものがある。

ようやくコンテナが視界に入ったとき、一人の少女とすれ違った。

「？」

見覚えのない少女だったが、まあどうでもいいだろう。

今はとにかく、コンテナの中の扇風機に会いたい。

「対価を忘れずに」

後ろから声が聞こえ、さっきの少女かと思い振り返ったら、そこには誰もいなかった。

「・・・？」

不可解だったが、あの少女は足が速かったのだろう。そう思った。

コンテナを開け、中に入る。

「扇風機、扇風機」

扇風機のスイッチを押して重かったバッグを机に下ろす。

そのときバッグを置いた風圧で机からひらりと何かが落ちた。

何かおいたっけな・・・。

それは封筒だった。

表には『福恩寺慈様』とあり、後ろには何もかかれていなかった。

今思えば、この手紙がなかったら今の自分はなかった。

そう、思う。

2. 5 (前書き)

過去編です。

本編には何の関係もないので、読み飛ばしても大丈夫です。

2. 5

小さいころは、幸せだった気がする。

×

「お父さん！」

そう呼びかけると、父はにっこりと笑ってこっちを振り向いた。

「ボール、あった？」

「いや、まだ見つからない。お前は休んでろ」

ついさっきまで、自分は父とキャッチボールをしていた。

しかし、父が投げるボールは重く。

小さい自分はうまくつかめなかった。

周りには子供にはつらい日差しと、ひたすら鳴き続ける蝉の音。

気づいたらボールをつかみ損ねていた。

どうやら日差しにやられたらしく、立ちくらみもしてきた。

そんなこんなで、どこかにいったボールを父は捜し、

自分は木陰のベンチで休んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1176s/>

家出少年 迷子少女

2011年11月10日20時29分発行